



Data

監督・脚本：ネメシュ・ラースロー
 出演：ユリ・ヤカブ/ヴラド・イヴ
 アノフ/エヴェリン・ドボシ
 ユ/マルツィン・ツアルニク
 /ユディット・パールドシュ
 /クリスティアン・ハルティ
 ング/レヴェンテ・モルナー
 ル/ユリア・ヤクポウシュカ
 /バラージュ・ツコル/ベン
 ヤミン・ディノ

👁️👁️ みどころ

しんどい映画『サウルの息子』（16年）で若き巨匠ネメシュ・ラースロー監督の名前を覚えたが、その“第2弾”も実に難解。主人公がド派手な帽子を被った美女なのは第1作よりもうれしいが、ストーリー展開はサッパリ！

女だてらに、このヒロインは一体何をかき回っているの？また、先代が経営していたブダペストの有名帽子店は、今どんな商売をやりながら“サンセット”を迎えようとしているの？

本作の評価（賛否）は難しい。特有のカメラワークには興味津々だが、クソ難しい映画は少し苦手。ラスト2、3分の塹壕戦のシーンもアピール力は十分だが、違和感も……。ちなみに、時代が“平成”から“令和”に変わった今、“サンセット”の評論を書いているのも、何かの縁……？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 『サウルの息子』の若き巨匠の最新作のテーマは？ ■□■

当時38歳の若き映画監督ネメシュ・ラースローは、長編デビュー作『サウルの息子』（16年）で第68回カンヌ国際映画祭のグランプリや第88回アカデミー賞の外国語映画賞等を受賞した。同作はホロコーストを描く映画の1本だが、これまでのどの作品とも違う、「ゾンダーコマンド」の視点からそれを描いたもので、とにかくしんどい映画だった。しかも、家族の一部がその犠牲者だというラースロー監督は、あくまでサウルの視点だけにトコトンこだわった撮影手法をとっており、それも同作の際立った特徴だった（『シネマ37』152頁）。これはもちろん、下手クソなカメラマンが撮ったためではなく、最初からカメラの焦点をある1点に合わせているためだ。そんな撮影手法の点でも、毎日大量に輸送されてく

るユダヤ人をガス室に送り込む任務を担当している主人公サウルの「ゾンダーコマンド」ぶりを注視するのは、ひどく疲れるものだった。

そんなラースロー監督の3年ぶりの最新作たる本作の時代は、第一次世界大戦直前の1913年。舞台はオーストリア＝ハンガリー帝国。そして、テーマはタイトル（邦題・英題）通りの「サンセット」だ。「サンセット」は単純に翻訳すれば「日暮れ、日没」だが、ラースロー監督は1913年を歴史の転換点としてとらえ、1つの時代が減びていく象徴ととらえているらしい。なるほど、なるほど・・・。

しかして、ラースロー監督が本作に登場させた主人公は、レイター・イリス（ユリ・ヤカブ）。このヒロインが『サウルの息子』とは全く異質の美しい女性であるのはうれしいが、撮影手法も問題提起の仕方、そして実はテーマも前作とそっくり！したがって、本作が前作と同じように難解な映画になっているのは仕方ないが、それがネメシュ・ラースロー監督の特性だから、それも仕方ない。ちなみに、ラースロー監督はイリスをジャンヌ・ダルクに例えているが、それは一体どういう意味？

■オーストリア＝ハンガリー帝国のお勉強をしっかりと！■

現在のヨーロッパは、一方では中東やアフリカからの移民問題で、他方ではイギリスのEUからの離脱問題で揺れているが、1913年当時のヨーロッパはオーストリア＝ハンガリー帝国が栄華を極めていた。その領土は広大なものだったし、首都はウィーンとブダペストだった。そして、公用語はドイツ語とハンガリー語だったらしい。

日本人はそんなオーストリア＝ハンガリー帝国についての知識に乏しいが、パンフレットにある「歴史的背景」によれば、「オーストリア皇帝兼ハンガリー国王であるフランツ・ヨーゼフ1世がウィーンから広大な領地および多くの国々、様々な文化と宗教を統治する多民族国家であり、一時は社会主義、無政府主義、国家主義が交じり合っていた。」と書かれているから、ビックリ。フランツ・ヨーゼフ1世の皇后であるエリザベートは、日本でもミュージカルや宝塚歌劇等でよく知られているが、第1次世界大戦前のオーストリア＝ハンガリー帝国やヨーロッパ全体の情勢について日本人はほとんど知らないはずだ、1914年に起きた「サラエボ事件」は、セルビア人青年が皇位継承者であるオーストリア大公フランツ・フェルディナント（トム・ピラス）とその妻ゾフィー・ホテク（ズザンネ・ヴースト）を暗殺した事件で、これが第一次世界大戦勃発の引き金になったわけだが、本作ではその直前のオーストリア＝ハンガリー帝国の実態の一部を窺うことができる。

本作の鑑賞については、そんな1913年当時のオーストリア＝ハンガリー帝国のお勉強をしっかりと！

■ヒロインの帽子に注目！そのまなざしにも注目！■

オードリー・ヘプバーンが主演したミュージカル映画『マイ・フェア・レディ』（64年）

では、貴婦人に磨き上げられたヒロイン、イライザのドレス姿はもちろん、華やかな帽子も目立っていたが、それはイライザが田舎の花売り娘だったときも同じだった。本作でも冒頭、華やかな帽子をかぶったヒロインのイリスが登場するので、彼女の美しいまなざしと共にその頭の上の華やかな帽子に注目！

続いて、ブダペストにあるレイター帽子店で帽子の品定めをしているシーンになるが、実は彼女は客としてきたのではなく、そこで働くためにやってきたことがわかると、対応していたチーフのゼルマ（エヴェリン・ドボシュ）は少々おかんむり。大阪人なら「それならそうと早く言えよ」と怒鳴ってしまいそうだが、ゼルマはレイター・イリスと名乗ったこの女性がレイター帽子店の先代の娘であることがわかると、怒鳴りたいのを押しとどめて、今のオーナーであるブリル・オスカル（ヴラド・イヴァノフ）に取り次いだのは当然だ。面接したブリルはイリスの帽子作成能力は先代の娘だから当然と認めたものの、なぜか採用は拒否。今日のホテルは手配するが、明日は元の店に戻るよう冷たく言い放ったから、アレレ。どうも、イリスは招かれざる客らしい。しかし、それは一体なぜ？そして、イリスは素直にそれに従うの？

いやいや、言葉は少ないものの、イリスのキリリとしたまなざしを見ていると、全然そんな気はないようだ。果たして、その晩ガスパール（レヴェンテ・モルナール）と名乗る男がイリスの宿を訪れてレイター家には息子がいたことを伝えると、それを知ったイリスの翌日以降の動きは？

■□■兄はレディ伯爵殺しの犯人？その追及の意味は？■□■

『サウルの息子』もラースロー監督のカメラはずっと主人公の後を追いかけていたが、それは本作も同じ。しかし、そこではガス室を中心とする主人公の行動範囲が限られていたし、主人公がやろうとしていることが明確だったので、ストーリー展開をある程度読むことができた。しかし、本作ではイリスの動き回る範囲が広いうえ登場人物も多いから、①イリスにはカルマンという名の兄がいたこと、②5年間ずっと喪服のままにいるレディ伯爵夫人の夫は、そのカルマンに殺されたと思われること、はわかるものの、それを知ったイリスがそれを追及することの意味がサッパリわからない。

イリスがレイター帽子店にやってきたことを、オーナーのブリルもチーフのゼルマも心よく思っていないことは、導入部のストーリーでよくわかる。しかし、その後、①「ブリルはうまい餌を投げ込んだ」と意味深なことを言い、また「ここを去れ 今週、ここで血が流れる」と警告するひげの謎の男ヤカブ・シャンドル（マルツィン・ツァルニク）、②公園でイリスに声をかけてきたオーストリアの客人フォン・コーニグ（クリスティアン・ハルティング）等が登場してくると、ストーリーは？？？さらに、③イリスがしきりに声をかける下働きの少年アンドル（ベンヤミン・ディノ）や、④時々スクリーン上に登場してくる馭者のガスパールもどんな役割を担っているのか、さっぱりわからない。そんな中でも

イリスはレディ伯爵夫人の屋敷を訪れたり、さらには下働きの少年アンドルに「兄はレディ伯爵夫人を救おうとしたのでは？」と問いかけたり、懸命の探偵稼業(?)を続けていく。さあ、導入部からいわく因縁ありげに名前だけで登場してきたイリスの兄カルマンは、本当にレディ伯爵夫人殺しの犯人なの？そして、今それを追及することにどんな意味があるの？さらに、そのことは本作の“テーマ”にどのように関係してくるの？

ハッキリ言ってそのことがわからないまま、思わせぶりにネメシュ・ラースロー監督のカメラはイリスの後を追いかけて、私立探偵のようにあれこれと動き回るイリスの姿を映していき、さあその落ち着く先は？

■□■皇太子がなぜ？店と王侯貴族とのつながりは？■□■

イリスがライター帽子店を訪れた時、同店は“大きな行事”を迎えるため忙しくしていた。その大きな行事とは30周年を祝う行事だったが、イリスが兄の秘密を追及する探偵調の物語になる(?)中盤以降は、同店には、さらにウィーンからフランツ・フェルディナント皇太子(トム・ピラス)とゾフィー・ホテク妃殿下(ズザンネ・ヴェースト)が訪問してくるといふ大きな行事が待っているから、それに注目！

しかし、いくらこの店の帽子が有名だからといって、なぜわざわざウィーンから皇太子や妃殿下がブダペストまでやってくるの？さらに、それに向けて店員たちがきれいなドレスを着てそわそわしていたが、それは皇太子に気に入られた誰かが選ばれて侍女になれるためらしい。それは店員たちにとっては名誉なことらしいが、それならなぜ、一番いいドレスをあてがわれたゼルマが「私は行かない」と言っているの？このように「誰が王室に選ばれるか？」でピリピリしている中、イリスは相変わらず単独行動で外に出て“調査”を続けていたが、スクリーン上ではいかにも意志の強そうなイリスの顔がクローズアップで映され、あちこち調べ回る姿が映しだされるだけだから、それがいかなる意味を持っているのか観客にはサッパリわからない。しかし今、ブダペストの町には騒乱(革命?)の雰囲気広がりが、ライター帽子店もそのターゲットにされていることは、間違いないようだ。

不幸なことに選ばれた女はゼルマだったが、咄嗟の機転でイリスがゼルマの馬車に乗り込みゼルマの代わりにウィーンに行くことになったから、ビックリ！しかして、ウィーンの皇太子や王侯貴族たちが待つ屋敷の中に入っていったイリスを待ち受けていた舞台とは・・・？

■□■ライター帽子店は生き地獄に。これぞ世紀末！■□■

イリスの体当たり取材(?)によって、ライター帽子店は長年にわたってウィーンの王侯貴族に店の美女たちを貢ぐ仕事までしていたことが明らかになったが、それは一体なぜ？そんなふしだら(?)で旧態然とした秩序はいつまで続くの？

イリスの兄はそんな店のやり方に反発して何かコトを起こしたのでは・・・？イリスの疑問は次々と広がっていったが、そんな中、レイター帽子店を巡る不穏な動きは頂点に。そして、イリスが男装をして男たちの集いに忍び込み、「レイターは？」と兄を探し始めると、あたかもその声を合図としたかのように、男たちは一斉に外に飛び出してレイター帽子店のガラスを割り、店に火を放ち、店の中に乱入して狼藉の限りを尽くしたから、店はたちまち生き地獄状態に。なるほど、こりゃ世紀末だ。

■□■サンセットはここにも！？本作は実に難解！■□■

本作はイリスがレイター帽子店に登場してきたところから始まり、暴徒(?)によってオーナーのブリルが燃え盛る炎の中で殺され、レイター帽子店が崩れ落ちていく中を、イリスが静かに立ち去っていくシーンで終わる。時代は1913年だ。他方、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇位承継者たるオーストリア大公フランツ・フェルディナントがサラエボで暗殺されたのは、1914年6月28日。それが第一次世界大戦のきっかけになったわけだが、本作のラストは、何と『西武戦線異状なし』(30年)で有名になった塹壕の中の姿になるから、それに注目！

狭い潜水艦の中も大変だが、塹壕の中での這いつくばった生活も大変。第1次世界大戦で人類ははじめてそのことを知ったわけだが、なぜかそこにイリスが看護婦姿で登場してくるから、ビックリ！もちろん、その頭上にド派手で綺麗な帽子はなく、簡素なナースキャップだけだが、その美しさと眼力の鋭さは不変。さあ、ネメシュ・ラースロー監督が本作ラストにこのようなシーンを持ってきたことの狙いは？いやはや、本作は実に難解だ。

ちなみに『キネマ旬報』2019年4月上旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、本作に3人の評論家が星5つ、4つ、2つと極端に分かれる点数をつけている。そのうち、5点の金子遊氏は「この方法論が時代劇でも効果的であることに驚く」と高く評価しているが、2点の那須千里氏は「極端に情報を制限された語り口はご都合主義と紙一重だ。」と厳しく評価し、さらに「ヒロインを演じたユリ・ヤカブの強いまなざしは一貫して変わらないが、迷いのなさは観客を突き放す。」と辛辣だ。しかして、あなたの採点は？

2019(平成31)年4月2日記